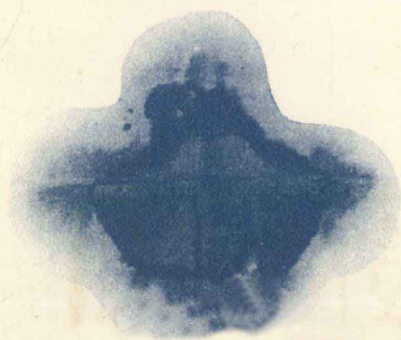


忍法忠臣藏

忍法忠臣蔵

山田風太郎忍法全集 7



講談社版

風

©山田風太郎 一九六四

忍法忠臣藏

山田風太郎忍法全集(七)第四回配本

昭和三十九年二月二十日 第一刷

著 者 山田風太郎

発行者 野間省一

発行所 講談社

東京都文京区音羽町三ノ一九

電話 東京 九三局二二二(大代表)

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大光堂黒岩製本所

定価 二五〇円

落丁・乱丁本はおとりかえします

忍法忠臣藏

大奥の伊賀者

一

江戸城大奥御広敷伊賀者の無明綱太郎はヘンな奴であつた。同僚がそう思うばかりでなく、綱太郎の伯父にあたる添番の無明伝左衛門もそうみとめざるを得なかつた。

後宮の美女三千人といわれる大奥であるが、やむを得ない役目で勤務する男たちも若干はある。表からの公用の取次をする役人、御用商人をさばく役人、お庭の手入れ、また警衛をする役人、台所役人など——た

だし、彼らは大奥のなかでも御広敷という一劃のみにつめていて、女ばかりの奥向きとは、ただ一カ所「下の御錠口」という通路をのぞいて嚴重に隔離されてゐた。御広敷伊賀者は、このうち御錠口を通る人または物の検査役で、添番はその監督官である。

伊賀者というのは、天正のむかし、伊賀の豪族服部半蔵が徳川家に召しかかえられたとき、いっしょにつれてきた二百人の忍者の末裔であつたが、それから百年をこえる泰平を経て、はたして忍法の素養のあるものがどれだけあつたか。——とくに、この大奥御広敷に代々勤務する伊賀者は、後宮の警察官というより、みな一様に、いじけた、陰湿な宦官みたいな蒼白い皮膚をしてゐた。

そのなかで、綱太郎は、まずその風貌から異彩をなっている。浅黒い皮膚はなめし皮のようなつやもち、眼は、このごろのいわゆる元禄の泰平にふやけた旗本などにはめつたにみられない野性の精氣をおびて

いる。それは最初から御広敷の諸役人の眼をひいて、
「あれは江戸育ちか」

と、伯父の無明伝左衛門にだれもがきいた。伝左衛門は慥然としてこたえた。

「江戸生まれにちがいないが、この五、六年、伊賀へ
いつておった」

「なに、伊賀へ？」

伊賀こそ彼らのふるさとだが、伊賀者がそのふるさとへかえらなくなつてから、何十年になるであろう。

「伊賀のどこへ」

「鰐隠れという谷じゃ。十七の年、忍法修行のためと
申して、勝手に出奔していった男じゃが」

「それで、綱太郎は忍法を修行して参つたのか」

「忍法を修行してきたかと申しても、にやにやしてお
るばかりで、はかばかしい返事もせぬが」

と、伝左衛門はにがりきつていった。少年の綱太郎
が、いまの伊賀者にあきたらぬむねの置手紙をのこし

て家出をしたという話をきいた当時は、内心でかした
と思つていたが、こんど呼びもどした綱太郎が、伯父
たるじぶんをどこか馬鹿にしているような気配がある
のが氣にいらないのである。

ただ、心中、ひとつ舌をまいていることがある。こ
んど伝左衛門の弟、つまり綱太郎の父親が死病にかか
つたとき、伝左衛門はあわてて伊賀へ人をやった。綱
太郎を至急呼びもどすためである。綱太郎はかえつて
きた。そのかえつてきたのが、いやに早い。「伊賀か
ら江戸まで何日かかったか」ときくと、「三日かかり
ました」という返事であつた。伝左衛門は唖然とし
た。伊賀から江戸までは百二十里はあるだろう。それ
を三日できたということは、一日に四十里走つたとい
うことになる。しかし、それから二十日以上たつてか
らやつとかえつてきた使いの男に、綱太郎の伊賀を発
つた日をきくと、綱太郎の返事がいつわりでないこと
が知れた。

さて、綱太郎は、亡父のあとをついで大奥御広敷に勤務するようになったが、やはり場ちが良かった感じがある。上役の伯父ばかりでなく、だれしもが馬鹿にされているように思った。江戸城の、しかも、もっとも作法のきびしい大奥で、彼はまったくコンパスがあわないのだ。はじめ馬鹿にされているように感じたのは思いすごしで、たんに野人と化した綱太郎の習性にすぎないとわかったのはまもなくであった。彼の起居ふるまいは、まったく傍人をはらはらさせた。彼自身の危険をじゅうぶん予測させた。

伊賀の山から出てきた綱太郎は、大奥の女性たちに對して存外関心をいだかなかったらしいが、そのかわり食い物には大いに興味をもったようであった。

大奥の食膳は、すべて御広敷御膳所で調理する。調理がととのうと、御台所頭から、御広敷番頭にそのむね報告する。御広敷番頭は御用達添番をともなつて御膳所に出張する。そこで、お懸盤なる容器へ料理し

た十人前の品をのこらず盛り、添番がまずこれを一箸ずつ味わい、つぎに御広敷番頭が味わい、しりぞいて相對座し、しばらくにらみあつてから、たがいに目礼していう。

「よろしゅうござろう」

かくて、九人前となつた料理のうち、汁は真鍮の鍋にいれ、煮物は春慶塗りの重箱に盛つて、御舟と称する舟型の容器につみこんで、御膳所の小役人がこれを奉じて御錠口にはこぶ。いちどの食事に五舟も六舟もあるのを常とする。

御錠口で御舟をうけとつた女中は、これを奥御膳所にはこび、ここでまた女官の毒味をうける。

「よいでありますう」

かくて八人前となつた料理のうち、一人前だけ、葵の紋、金蒔絵のお懸盤にのせ、「お次」とよばれる女中控所にうつし、「お次」が御休息の間まではこぶと、御中臈がうけとつて、ようやく將軍乃至御台さまの御

前にはこぶ。

そして將軍乃至御台さまは、ふたりの御小姓、御年寄、中年寄、御中臈などの熱心な注視のうちに食事をするのである。

お肴は一箸、他の品は二箸つければ、ただちに、

「おかわり」

と、御年寄がさげび、御中臈がすみ出て、目八分にささげた三方にそのお下がりをうけ、もとの座にかえると、うしろの敷居外にひかえた「お次」の者へ、

「何々のおかわり」

と、申しつける。「お次」はまたべつの女中に命じて、奥御膳所に待機させてあるのこり七人前の料理のうち、必要のものを運ばせるのである。

このものものしい大機構を知って、「上様はおきのどくだな。それに少々……」と、綱太郎がつぶやいたのはむりもない。

「少々」の次の「馬鹿げてもおる」というつぶやきを

のんだのは、いくら綱太郎でもそれくらいの遠慮はあったとみえる。

さて、無明綱太郎が、ある日、のこのこと御広敷御膳所にあらわれた。

二

むろん所管外の場所で、本来彼のくるべきところではないが、そもそもこの御膳所は、御膳奉行のもとに、御台所頭二人、組頭三人、御賄調役三人、御賄吟味役三人、御台所人三十人、御小間役三人、御賄方四十人、六尺五十人、合計百三十余人が火事場のごとくはたらいっているのだから、そのときだれにも気づかれなかったのである。

ついでにいうと、これとはべつに表御膳所の方でも、六、七百人の台所役人がはたらいていたというから、以て江戸城の規模を知るに足る。その材料たるや、魚は中程のみを切りとってあとはすて、鳥はさき

身のみを用い、鰹^{かつお}ぶしは二、三度けずただけで、味噌^{みそ}は一鉢^{ひとばち}二貫目につき五百目にはねのけるといったぜいたくさであった。もともと魚にしても青物にしても、毎日役人が市場に出張して、欲するものを欲するだけ「御用^{ごよう}」とさけんで召しあげる。それがただ同然の価^{あたい}であったから、公儀^{こうぎ}にとってはいたくもかゆくもないのである。——それでも後年明治になって、市場にゆき「幕政のころよりだいぶ楽になったであろう」ときいたところ、「なに、税のない昔の方がよほど楽でござんした」と異口同音にこたえたという。

十疊、二十疊、あるいは三十疊の各係役人の詰所にめぐらされた御膳所の中央には六つの大かまどがならび、かまどのうしろから左右にかけて、銅^{あか}を張った檜^{ひのき}の火屏風がたてまわしてある。また長さ二間半、幅一間の石造りの大囲炉裏^{おおいり}のある四十坪ばかりの板の間の天井も銅張^{あか}りで、井戸のある二百坪の板の間は、天井のかわりに金網張りだ。

湯気や煙やさけび声のなかに、粗末な肩衣^{かたぎ}をつけた百人ちかい御台所人や賄方^{まなひかた}が、あるいは野菜をきざみ、鳥を煮、菓子をならべているのは壯観だが、その隅^{すみ}つこで、やはり肩衣をつけた味噌すり役人が、直径三尺もある石のすり鉢に二貫目の味噌をいれ四尺五、六寸の搗粉木^{うりこぎ}おっとって、一心不乱にすりたてている光景はおかしかった。

「ああ、いけねえ」

縦四尺、幅二尺五寸の大俎^{おたま}に鰹^{かつお}をならべて、刺身^{さしみ}をつくりにかかっていた賄方のうしろで、ひとりの老人が大声でさけんだ。肩衣をつけているのに、向こう鉢巻^{はちまき}をしている。

「といだらかりの包丁^{ほうちよう}をつかっちゃ、味がおちる。ひと晩水につけておくもんだ。きのうといだら包丁はねえのか」

「なぜだね」

と、ふいにその横で綱太郎がいった。

「なぜ、といだばかりの包丁をつかうと味がおちるんだ」

老人は、ちんまりしたまげは真っ白だが、つやつやしたあから顔をむけて、すこし妙な表情をしたが、

「金^{かね}っ氣^けがつくんでさあ」

と、こたえた。

「金氣^{かねけ}——なるほど、しかし、金氣なら、三日まえていだ包^ふ丁^{てい}でもやつぱりつくだろう」

「それあ、しかたがござんせん。木刀で刺身をつくるわけにもゆかねえ」

なんとなく、みなもったいぶった台所役人のなかで、この老人はいま河岸^かからきたように伝法な言葉づかいであった。網太郎はにやりと笑った。

「わしなら、紙で切れるな」

「へっ、紙で？」

網太郎は、ふところから懷紙^{かひし}をとり出した。その一枚をぬいて、三つに折った。

「どれ、みせろ」

と、賄方をおしのけて、姐^{まいた}のまえにすわると、鯉^{こひ}の切身をおさえもせず、すすつとその懷紙で切っていた。紙で魚肉を切るふしぎもさることながら、なんというみごとな手練だろう。そこにあらわれた厚みの寸分かわらぬ刺身の美しさに、ふたりはあっと息をのんだまま、眼をむいたきりであった。

「刺身をつくったのははじめてだが、どうだ、うまいだろう」

と、彼は鼻をうごめかして、ふと眼をあげて、向こうにつみあげられた西瓜^{すいか}をながめた。

「西瓜にしても、包^ふ丁^{てい}できれば、金氣はつくだろう。あれをひとつもってきてごらん」

賄方は、まじまじと網太郎の顔をみていたが、彼が何をしようとしているかを知ると、唇をゆがめて、そのひとつを運んできた。

網太郎はそれを姐の上にのいた。まわりの賄方が

「なんだなんだ、何をしようってんだ」と十数人寄ってきた。綱太郎はへいきでみなを見まわしながら、手の紙でかるく西瓜をなでた。まさに、なでたとしかみえぬうごきであったのに、彼がもう一方の指でとんとたたくと、西瓜は真ッ赤な切り口をみせて、左右にぽっかりわれてころがったのである。

この変な包丁をくるくるとまわめて捨て、手をはたいて、笑いながらゆきかかる綱太郎をあわてて老人がつかまえたとき、やっと賄方たちの口から異様なうめき声があがった。

「だ、旦那」

と、老人は肩で息をしながらいった。

「あたしや、これでも魚料理にかけちやお城第一、いや、江戸一番とうぬぼれている男でさ。本音をはくと、公方さまにほんとにうめえものを食わしてあげられっこのねえこんなお城づとめの料理人は気に染まねえが、高家の吉良さまのお引立てでひっぱりされてきた

んだが、いまの紙の包丁にやあ、すっかりきもをつぶしました」

と、老人は声をふるわせて、

「旦那、その包丁さばきは、どこの板前の伝授で？」

日本じゃありますめえ、韓か、唐人か——」

無明綱太郎は、けろりとしていった。

「これは、忍術じゃ」

「へっ、忍術？」

みながすっとんきょうな声をあげたとき、やっとこのさわぎに気のついた御台所頭が、眼をむいてかけつけてきた。

三

その無明綱太郎が恋をした。まったく女などには興味のなさそうだった綱太郎が、いつ、どんなはずみで、その女を見染めたのかわからない。

彼は、ひところ、御膳所にいりびたりであった。料

理よりも、あの台所人の老人、それでもお城につとめるとあれば御家人待遇で苗字がついて、ただしじぶんでかんがえたどみえて、姐、銀兵衛という爺さんと、ひどくうまがあつたらしいのだ。伊賀者が御膳所に入出すことはむろん違法だが、あの日鯉の刺身を召しあがつた公方様と御台さまが、「これほど美味な鯉をたべたことはないぞよ」とおほめの言葉があつて、おふたりで五人前もおかわりを所望されたという事実があつたので、それ以来、御台所頭たちも黙認するほかはなかつたのである。

もっとも彼は、料理そのものにはだんだん興味をうしなつて、ただ傍若無人にそこらのものをばくばくとつまみ食い——つまみ食いではない、つかみ食いで、しかも彼は魚でも野菜でも、生のものが好物らしかった。鳥なども毛をむしつたままのやつを、ばりばりと骨まで食つてしまうのである。——その食欲の満足のために出入りしている案配であつたが、やがてそれに

も飽きてきたらしく、あまり御膳所にあらわれないようになつた。そのため、こんどは好奇心が女にむけられたのか、あるいは女を思いつめるあまり、食欲が忘れられたのか、そこはどっちだかわからない。

相手が悪かつた。それは「下の御錠口」につとめるお使い番の女中であつた。

将軍が出入りする「上の御錠口」につとめるいわゆる御錠口衆は高級の女中だが、それ以外の世間とのただひとつの通路たるこの「下の御錠口」に待機している使い番はお目見以下の下級の女中であつた。杉戸一枚で、内側をこのお使い番がまもり、外側を添番と伊賀者がまもる。午前六時のお太鼓で杉戸をひらき、午後六時、双方提灯をそこへおき、一礼してしめる。夜はむろん交替で不寝番に立つ。この二間幅の黒塗りの大杉戸のまえには、「これより男入るべからず」とかいた札がかかかつてあつた。

この「男禁制」の外の番人の男が、内の番人の女に

恋をしたのだ。しかも、無明綱太郎らしく、堂々と付け文をした。そして、よほどのぼせていたのであろうか、忍者にあるまじきへまをやったもので、たちまち現場をおさえられたのである。

天守閣の空に鳶の舞っている秋のある午後、ちょうど、いちばん風紀にうるさい滝川という御年寄が外出さきからもどってきて、奥へ入ろうとしていたときであつた。「お通りあそばす」という声とともに、杉戸の内側にひれ伏していたお使い番の女中に、杉戸の外に平伏している伊賀者の手がゆつとのびて、何やら手紙らしいものを袖に入れたのを、五、六歩ゆきすぎた滝川が、ひょいとふりむいて見つけたのだ。

彼女はたちもどってきた。

「ゆう、それはなんじゃ」

「はい……」

ゆうという女中は、薄あかりのなかに耳たぶをそめて、顔をふせたままであつた。そのふるえをみると、

綱太郎もふるえてきた。滝川よりも、じぶんの失態よりも、彼女の恐怖を恐怖したのである。彼は娘が、きぬごし豆腐みたいにふるえ砕けはすまいかと案じたほどであつた。思いがけぬ恐怖の伝染に、実ははじめてこのとき、じぶんがどれほどこの娘を恋しているかを知って、彼は愕然としていた。

「いま、その伊賀者のわたし文をみせや」

おゆうが、なおうつむいたままなので、滝川はかみこんで、むりに娘のたもとからいま見たものを取りあげた。何も知らなかった添番の無明伝左衛門はきょんとしている。滝川は、手紙をよんだ。

「おれは無明綱太郎。こんど宿下がりの節は、四谷伊賀町の組屋敷にきて下され」

無明伝左衛門は、あつとさげんだ。土気色になって、綱太郎をふりかえる。綱太郎は声もない。

「それは」

と、娘が顔をあげた。円顔で愛くるしく、羽二重の

ように繊細な皮膚をした娘であった。

「父が綱太郎のからは是非包丁の秘伝をうけたいと申し、綱太郎どのがわたしを通じて伝授してやろうと仰せられて、その日どりのうちあわせでございます」

「そなたの父というと？」

「御広敷御膳所に御奉公いたしまする御台所人組銀兵衛と申すものでございます」

こんどは綱太郎が、口のなかであつとさけんでいた。付け文をするほど惚れていながら、迂濶にも彼は、おゆうがあの組銀兵衛の娘だとは、いまのいままで知らなかったのである。

「無明綱太郎に、包丁の秘伝をうけたいと。……お、あの伊賀者か」

滝川も、ようやく、かつての話を耳にしてい、思ひ出したらしい。綱太郎をふりかえて、微笑した。

「左様か。しかし、ここは大事な御錠口、お使い番と伊賀者が、わたくしごとの口をきいてはなりませんぞ

え。こんどことは大目にみてつかわすが、以後氣をつけや」

滝川は文をかえして、しずしずと奥へ去った。綱太郎は平伏したまま、伯父の伝左衛門がいやというほど肘でわき腹をついたのにも、恐ろしい眼をしてにらみつけているのにも無神経でいる。

死花献上

一

おゆうが、四谷伊賀町の組屋敷の綱太郎を、ほんとうにたずねてきたのは、それから数ヵ月をへた冬の日のことであった。綱太郎は狼狽し、また有頂天になつてよろこんだ。

「こ、これはようおいでなされた。まるで夢のようじゃ。いつぞやは……」

と、彼らしくもなくまっかな顔をして、

「よういいぬけられたな。いや、あの折りはまったく冷汗三斗の思いで」

「あれだけのお文でよろしゅうございました。御年寄さまから読みあげていただかなければ、わたしもどう申してよいやらわからなかったに相違ございませんぬ」

おゆうは微笑んだ。ちらと綱太郎と眼があうと、利発げな言葉に似あわず、ういういしく頬にはにかみの薄紅をちらした。その血のいろがやがてひくと、まじめな表情にもどって、

「きょうは、綱太郎さまにおねがいがあつてうかがったのでございます。あのおり、御年寄さまに、とっさにいいのがれましたことが、まことのことで相成りました」

「なに、わしにねがひとま？」

「包丁のことで、お救いいただきたいのでございます」

綱太郎はすこし失望したが、すぐに熱心な眼いろで、それを見まもった。

「綱太郎さま、あなたは、ちかく御前に披露いたします、表御膳所と御広敷御膳所の生作り試合のことをお耳になすっていらつしやいますね」

「いや、存ぜぬが」

おゆうの話したことは、こうである。

十日ばかりまえ、上様は表で鯉の生作りを召しあがつて、いたく感心あそばした。上様が表で御食事をなさるときは、もとより表御膳所の調理によるものだ。

「これを調理したは、何と申す料理人か」

と、上様が侍臣をかえりみられると、侍臣たちはしばし私語したのち、

「それは川澄助八と申すものでござります」

と、答えたあとで、

「とり川澄助八、そこよ浅野屋に貞子をつとめさせこ

よる包丁の名人の由でござりまする」

といった。ちようどその日には、高家衆と柳の間詰めの大名連が陪食していたのである。末座にあった播州赤穂五万三千五百石の浅野内匠頭は、いたく面目をほどこした様子であった。

このとき、同座していた高家の吉良上野介が、大奥の御広敷御膳所にも、姐銀兵衛という包丁の名人が奉公いたしておるはずだといひ出したのである。銀兵衛は、上野介の推挙した板前であった。

「銀兵衛の腕前の水際だっておることは、とてもこれしきのものではござりませぬ。ご存じないとあれば、いちど銀兵衛に生作りを調理いたさせて、御台さまともども、是非御試食願わしゅう存じまする」

この言葉から、はしくも、表と奥の包丁さばき争いの企てが生じたのであった。

のんきな話とみるのは他人のことだ。当人にとっては、浅野内匠頭と吉良上野介の名譽につながり、また表と奥の御膳

所全体の面目にかかわるという雲ゆきとなつてしまつた。むろん銀兵衛は、自信満々としてこの話をうけた。ところが――

「ところが……おとといの夜のことでございます。父は、ふいに箸をとりおとしました。ひろいあげても、またころがりおちます。右腕がかすかにしびれていることに気がついたのは、そのあとでございます。知らせるひとがあつて、わたしはあわてて宿下がりをとらせていただいて、家にかえりました。父は中風の氣をおこしたらしいのでございます」

おゆうは、蒼ざめた顔色であつた。銀兵衛はふいに軽い脳出血に襲われたのである。それはむろんこの際狼狽すべき突発事であつたが、いっそうわるいことは、それが軽いということであつた。他人の眼には、それほど支障があるとはみえないのである。だから、いまになつてこの包丁争いにお断わりを申し出れば、

臆病風にふかれたものとみられ、試合しないうちから試合にまけたことになる、と銀兵衛は身をもんで懊悩しているのであった。

「そして、ふと、あなたさまのことを思い出し、おれの代わりに相手にひけをとらぬ生作りをつくれるのは、あの無明さまのほかにはない、といい出したのでございます」

綱太郎はいった。

「拙者でも、よろしいのか」

「それは、お目見めみえ以下の台所人が、上様や御台さまの御前に参ることはかないませぬ。また料理の御前試合など、表むきにごらんあそばすはずもございませぬ。

ただ双方のつくった生作りいけづきをおん眼にかけただけで、もともと父はこのごろじぶんでめったに包丁をとったこともございせんから、父の指図でつくったということになれば、おなじことなのでございます。……綱太郎さま、お武家さまこそ身みのつくまようよりつこ、よ

いおねがいでございますが、お助け下さいませうか」

「武家といっても、台所のあぶら虫のような伊賀者です」

と、綱太郎は笑って、きいた。

「試合は、いつでござる」

「三日のちでございます」

三日のち、將軍のまえに、浅野内匠頭あさののちやうずと吉良上野介きちらじやうけが相對あひたいして坐り、さらにそのまえに、海の水をたたえた朱塗りの盥たらひが、うやうやしくもち出された。

両側には、側用人そばようじんとして権勢第一の柳沢吉保よしやすをはじめ

めとして、大老、老中、若年寄などが、かたずをのんで居ながれている。他愛のない見世物みせものだから、みなわれもわれもと拝見を願ひ出たのだが、こう閣老級が総出になってみると、やはりただごとでないようなもの。……、手田式てんたいしきは、貧かちしく、日ひと、しる。